

# 「供儀」

脚本・竜崎だいぢ

## 〈登場人物〉

- ・ 飴村千代子（あめむらちよこ）女 25歳
- ・ 佐糖いちこ（さとういちこ）女 25歳
- ・ 桃井蜜ル（ももいみつる）男 25歳
- ・ 餡藤（あんどう）男 39歳

夜、深い時間。薄暗い部屋。

甘い匂いがこびりついている。どこかの調理室のようだ。

ひんやりと涼しい。部屋の奥に、女が見える。そばには男もいる。

先生 餛村……大丈夫か。

餛村 ……。

先生 餛村……？

餛村と呼ばれた女、振り返る。

両手にキッチン用の厚手のゴム手袋をしている。

餛村 ……いらつしゃい、先生。

先生 餛村、お前、大丈夫なのか。

餛村 何がですか。

先生 何が、つて……。お前が連絡してきたんじゃないか。助けてくれって。来てくれないと、……。死んじゃうからって。

餛村 そうなんです。排水溝が詰まっちゃって。あとからあとからどんどんあふれてくるから、もう死んじゃうかと思いました。

先生 排水溝……？

餛村 ねえ先生。

先生 ……なんだ。

餛村 あたし嬉しいです。

先生 え。

餛村 来てくれたから、ここに。

先生 ……。

餛村 先生が、こっちに、来てくれた。……嬉しい。

先生 ……？ ああ。

餛村 ありがとうございます。

先生 おれは、べつに。

餛村 やだな。先生に言ったわけじゃないですよ。

先生 先生 先生 先生 先生 先生 先生 先生 先生 先生

……？

……。 (微笑んでいる)

なあ、飴村。

はい。

佐糖が大変なんだ。お前にも連絡あったらろ。

……。はい。

今は桃井に任せてる。大丈夫なら一緒に。

先生。お茶、飲んでってください。

え。

来て下さったお礼に。ね。

……。

黙ったまま、見つめ合う、飴村と先生。

どこかの居酒屋。4人がテーブルを囲んでいる。

4人

かんぱーい！

飴村

はー、おいしー。

いちこ

けど、こんな事ってあるんだね。

飴村

ねー。

先生

ほんとにな。人生何が起こるかわからん。

桃井

何年ぶりになるんすかね、先生もあわせて、4人で集まるの。

先生

お前らが卒業してからだから、7年とか、8年とか、それぐらいぶりだろ。

飴村

卒業してからもうそんなになるんだ。

いちこ

長かったような、短かったような。

桃井

でも飴村、よく先生と連絡取れたな。

飴村

でしょ、Facebook ってすごいよね、頼んでないのに「知り合いかも」とかい

先生

って、高校時代の嫌いだっただ奴とか出てきたりするじゃない。

桃井

いきなり知らない奴から友達申請が来てな。

飴村

え。まさか。

先生

へへへ。

先生

普段なら無視するんだけどな。プロフィール写真に見覚えがあったんだ。

飴村

え、先生、覚えててくださったんですか！

いちこ

あのFacebookの写真、千代子が写真部のコンペで唯一入選した写真だったよ

ね。

飴村

そー。いちこも覚えててくれたんだ。うれし。

いちこ

あんたが自分で言ってたんでしょ。

飴村

へへへー。そうでした。

先生

よくある風景写真なだけどな、妙に記憶に残ってて。そしたらメッセージが

先生

来て、「以前高校の写真部でお世話になった飴村です。覚えてますか先生」つ

桃井

覚えてたんすか。

先生

お前らの世代は、まあ、個性的だったしな。覚えてたよ。

飴村

嬉しいです、先生。

先生 だから、もう先生はやめてくれ鮎村。昔の話なんだから。

鮎村 ええー、でも、先生は今でも先生じゃないですか。高校の先生は辞めちゃって

も、今はライターの先生、でしょ。

先生 まあ、な。

辞めてどのくらいになるんすか。

桃井 もう5年になるかな。早いもんだよ。

先生 先生らしいですよ、教師辞めてフリーライターなんて。

いちこ そうか？

わたし、先生の書くテストの文章好きでしたよ。ほら、長文読解の例文とか、先生が勝手に書き下ろしたりしてたでしょ。

先生 ああ、そういや、そんなこともしてたかな……。

いちこ 普通なら何かの小説引用するような問題で、自分で文章作っちゃうんだもん。

先生 大学でも、先生が作るようなあんなテスト問題、見たことなかったです。

鮎村 というか、お前らの腐れ縁も相変わらずだな。

先生 えー？

滝野高校写真部、最後の部員のお前らが、未だに三人一緒にいるとは思わなかったよ。

桃井 別に、おれらずっと一緒だったわけじゃないんすよ。こうやって集まったのだから、一年……、以上ぶりだし。

先生 そうなのか。

いちこ わたし普段は、駅前のショッピングモールにあるケーキ屋さんで働いてるんです。「パティスリーカノン」っていうお店。先生知ってます？

先生 いや、このあたりに来たのも久しぶりだからな。

鮎村 すっごい美味しいケーキ屋さんなんですよ！ いちこ、そのチーフパティシエなんです。えっと、一番えらいひと、だよ。

いちこ うん、まあ、そうかな。

先生 へー、あののんびり屋の佐糖がなあ。

いちこ 今日わたしがミツくんの会社にいたのは、ミツくんの手がける洋菓子の、新商品企画の、……えっと、なんだっけ。

桃井 アドバイザー兼デザイナー？

いちこ そうそう、それ、とかいうので、出向してくれなかったって頼まれて。

先生 へー。

桃井 こう見えていちこ、すごくセンスいいスイーツ作るんです。味はもちろん、見た目にも、すごくいい。以前から新商品の企画が立ち上がるたびに、こっそり助言もらったりしてたんですけど、このままじゃ佐糖のキャリアにならないな

あつて。今回はじめて、おれが企画の責任を任せてもらえるようになったんで、今までの恩返しも込めて、企画に参加してもらったんす。

いちこ

別に今まで通りでもよかったのに。

桃井

だから、それじゃお前にトクがないから。

いちこ

今まで通りごはん奢ってくれるだけでいいのに。

桃井

ごはんくらい、なにもなくても奢ってやるから。

いちこ

あーそ、ありがと。

飴村

けど、いちこがうちの会社に出向してるなんて知らなかった。あたしびっくりしたよ。

いちこ

あー、それは、ごめん、急に決まったから。っていうか、千代子が先生連れて来たのだって、わたし相当びっくりしたよ。会議室でわたし椅子から転げ落ちるかと思った。

飴村

それは、ミツくん驚かそうかなーと思って、内緒にしていたっていうか。

桃井

そうだよ。おれも人事部に新規のコピーライターは発注したけど。

飴村

びつたりの人がいるんです！　って上司に言ったら、全部任せるって。

桃井

お前人事部じゃないよな。

飴村

んー、そうなんだけどね。なんでかな。

桃井

面倒事全部押し付けられたな。

先生

まあ、その結果こうやって、お前らと再会できたんだ。おれは嬉しいよ。

桃井

(急にかしこまって) あの、先生。

先生

なんだ桃井。

桃井

先生とぼくらは、高校時代、教師と生徒っていう間柄でしたけど、今は同じ仕事を任された、社会人同士です。だから、これからは、対等に話をさせてもらおうと思ってます。

先生

……おお。

桃井

立場上、失礼な事とか、生意気な事とか、言うこともあるかと思うんですけど。

先生

おお。構わないよ。お前が企画の責任者だもんな。

桃井

はい、あの、宜しくお願いします。

先生

……桃井お前、大人になったなー。

桃井

はい？

先生

いや、あの頃お前、こんなにハキハキ喋れる奴じゃなかったもんな。なんか感動したわ。

桃井

いや、そりゃおれだって成長しますから。

先生

そうか、そうだな。

飴村

あー、あたしい、明日から会社来るの楽しくなっちゃうなー。高校の頃に戻っ

たみたい。

いちこ 別に、わたしも先生も毎日来る訳じゃないけどね。

飴村 遠慮しなくても、毎日来てもいいのよ。

いちこ 遠慮してるわけじゃないから。

飴村 そーお？

いちこ お店もあるしね。

飴村 そーお？

先生 そういや、お前ら写真は続けてるのか。

桃井 続けてるって言ったら、いちこぐらいかな。

いちこ でも、わたしも、昔みたいに撮ってないですよ。使ってるのも今はミラーレス

の一眼だし。お店のチラシ用に撮るぐらいです。

飴村 けど、いちこのあれ、すごいよね、インスタ！

先生 インスタグラムか。

いちこ あれはお店用のアカウントだから。

飴村 でも、すごいっぱいの人が見てるんですよ。

いちこ まー、お店用だから。

先生 へー、見てみたいな。

いちこ あ、よかつたらぜひ。でも恥ずかしいな、本当、上げてる写真、全然大したことないんで。

先生 いやいや。形はどうあれ、写真を続けてくれてるのは、やっぱり嬉しいよ。

いちこ ……。

桃井 先生、おかわり、頼みます？

先生 あ、ああ、そうだな。

飴村 じゃお料理も追加頼もうよー。

いちこ そうだね。

飴村 あたし串カツがいい。

いちこ あーいいねー。

飴村 いちこさあ、会社の近所にある串カツ屋さん知ってる？

いちこ ううん、知らない。

飴村 すっごい美味しいお店があるんだよー、今度教えるから。ていうかていうか、

今度一緒にランチしよー！

いちこ そうだね、久しぶりに！ えっと、串カツだったら、盛り合わせ、串盛り海鮮

づくし、店長の気まぐれ盛り、何これ。

桃井 その時の店員の気分でラインナップが変わんの。本数とかも全然違って。

いちこ へー。頼んだことあるんだ。

桃井　こないだはバームクーヘン入ってたかな。

いちこ　それ美味しいの？

桃井　食べたら分かる。

いちこ　え、どれにする？

飴村　じゃあさ、せーのでみんなで指差して決めようよ。

いちこ　えー。

先生　よし、わかった。先生はもう決めたぞ。

桃井　早っ。

いちこ　えー、迷うー。

飴村　じゃあ行くよ、いっせーのーでっ。

全員で、メニュー表を指差す。4本の指が、一つのメニューに集まる。指されたのは、「店長の気まぐれ盛り」。やがて破顔して。

女子　スイマセーン。

いちこ　あれー、聞こえてないかも。

飴村　あたし行ってくるね。

いちこ　ごめん、ありがとう。

飴村、席を立つ。

残った三人、楽しそうに談笑している。それを少し離れて見て。

飴村　……………みんな嘘ばかり。



深夜。

先生がひとり、自室でパソコンに向かって仕事をしている。部屋の明かりは消えている。

ノートパソコンのモニターの明かりだけが、顔を浮かび上がらせている。パチパチとキーボードを打つ音。マウスをクリックする音。

先生

……。 (ため息)

キーボードを打つ手が止まる。

少し考えて、手元の資料のような雑誌をばらり、開く。

それは、心霊現象等を面白可笑しく書いたトンデモ本。

興味なさそうにペラリ、ペラリ、めくる。

けなすように、本の中の見出しを声に出して読んだりする。

あるページで手を止め、適当にそのページにぐいぐいと開きグセをつける。

そのページを見ながら、またキーボードを打つ。

先生

こっくりさんを……。逃がさない……。ためには……。

一連が、とても、気だるげ。

やがて、モニターを少し長めに見つめ、エンターキーを押す。

一仕事終えたような脱力感。

先生

(伸びをしつつ) ……何時だ? ……寝るか……。

言いつつ、パソコンを見ている。

メールやニュース記事や、閲覧数なんかをぼうつとチェックしている。

先生

好きだねえみんな……。今も昔も心霊ネタは。(けど)そろそろ別のネタ持つてこないとな。9月か……。

おもむろに、何かを検索。

先生

パティスリー……パティスリー、カノン。

一つのページに行き着く、それは。いちこのインスタグラム。

先生

嘘だろ。17万フォロワー、佐糖あいつすごいな。

……何やってんのかねえ、おれは。こんなクソブログ、誰が読んでんだか。

その時、ピコン、と音がする。ブログにメッセージが来たようだ。

先生

まただ。……「わたしを幸せにしてください、にじゅうまる」。……幸せにしろって言われてもなあ……。どこの誰かは知らないけども、こんなクソブログにそんなコメントしたって、……幸せになんかなれるわけないっての。

先生、スマホを見つめる。

手に取り、何かを打ち込みながら、パソコンを閉じる。

いちこと桃井がいる。書類を眺めたりしている。  
いちこのスマホがぴろん、と鳴る。

いちこ

まただ。

桃井

どしたの。

いちこ

わたしのインスタ、まとめサイトに取り上げられてるって。「これから流行るかも?! 知られざる極上スイーツ10選」。こういうの書く人ってよっぽど暇なのかな。

桃井

そういうの書く奴は、アフィリエイトが稼げれば何でもいいの。腹立つなあ。

いちこ

別にいいけどね、フォロワー増えるし。

桃井

どっかの誰かに利用されてんだぞ。こっちに1円も入ってこないし。

いちこ

いいよ、悪いこと書かれてなかったら損しないし。

桃井

…:ポジティブだねえ。

いちこのスマホがまた、ぴろん、と鳴る。画面を見つめるいちこ。

桃井

(資料を2枚出して)…:で、どっちがいいと思う?

いちこ

(片方の資料を指差して)断然、こっち。

桃井

だよな。

いちこ

原価的にこっちっていうのは分かるけど、でも、こっち。

桃井

うん。

いちこ

これってさ、コンビニ商品なんだよね。

桃井

一応。

いちこ

初めてだよね、コンビニ商品。

桃井

まあね、頑張ってます。

いちこ

本当にうちの店の名前入るの?

桃井

もちろん。

いちこ

いいの。

桃井

いいに決まってるでしょ。

いちこ

すごいね、こんなの任されて。

桃井　うちの会社おっさんしかいないから。あの人たちに任せたらどうなるか。  
いちこ　確かに。

桃井　それに、おれには大きな後ろ盾があるからね。  
いちこ　わたしのこと？

桃井　お世話になっております。  
いちこ　お世話しております。  
桃井　お世話しております。  
桃井　分かった、こっちで話進めるわ。  
いちこ　まー、出来るならそれが一番かな。  
桃井　いちこ、今日はこの後は。  
いちこ　んー。

桃井　おれこのまま上がりだから、メシでも食う？  
いちこ　いや、今日はちよっと、予定あつて。  
桃井　そうか。……なら仕方ないな。  
いちこ　試食会って来週の火曜だよな。  
桃井　うん。  
いちこ　じゃ、また火曜に。  
桃井　あ、いちこ。  
いちこ　なに。

桃井　この、没になった方のパッケージプラン、どこが悪かったかまた教えてくんない？  
いちこ　え、どして。  
桃井　実はこれ、後輩が担当しててさ。  
いちこ　へー、そうなんだ。  
桃井　そいつ結構頑張つてて。けど、なかなか採用されなくて。助言してやりたいんだけど、どう言えいいのか迷つてて。  
いちこ　んー。ちなみに聞くけど、こっちのプラン、ミツくんが作ったんでしょ。  
桃井　おお。  
いちこ　じゃ、助言出来るでしょ。  
桃井　え。  
いちこ　今の流行りとか、市場調査とか、もちろんその辺も足りないとは思うんだけど、なんか、よく見せようと頑張りすぎなんだよね。それでいて、決定打に欠けるというか。  
桃井　……。  
いちこ　これは、陳列台に並んでも、選ばれないかな。  
桃井　……そうか。

いちこ あ、ごめん。もっとシンプルに考えてみたらって、その後輩ちゃんに言ってみれば。

桃井 おう、そうだな、ありがと。……後輩ちゃんって。

いちこ だって、女の子でしょ。後輩ちゃん。

桃井 ……なんで分かったの。

いちこ ……なんとなく？ ……デザイン的にそうかな、って思っただけ。そうか。

桃井 うん、じゃ、お疲れ。

いちこ あー、ごめん、あといつこ。

桃井 なに。

桃井 ……大丈夫？

いちこ ……何が。

桃井 ……いや……。

いちこ もしかして、先生のこと。

桃井 …………まあ。

いちこ なんて顔してんの。大丈夫に決まってるでしょ。

桃井 ほんとにそうなのか。

いちこ 高校の時の話でしょ。あれから何年経ったと思ってるの。

桃井 だけど。

いちこ 前も言ったけど、先生には3年の時に告白して、ふられたの。それでおしまい。まー正直あんまり会いたくなかったけど、気まずいし。けどもう大丈夫だから。

桃井 ……。

いちこ なに。

桃井 ……しんどくなったら、また話聞くから。

いちこ ありがと。あ、そうだ。

桃井 なに。

いちこ しんどいっていったら、実はお店のインスタ、最近変な粘着がいるんだよね。粘着？

桃井 多分、複数のアカウント使ってコメント書いてるんだけど。それが、意味のある言葉じゃなくて、単なる平仮名の羅列というか、意味不明なコメントが大量に書かれるんだよね。ちよっと気味悪くて。だから、今回の企画でうちの店の名前出すの、若干不安なんだよね。

桃井 分かった。うちで調査させるわ。

いちこ そんなことできるの。

桃井 もちろん。会社でそういうの頼んでるところあるから、話しとく。

いちこ よかった、なんか安心した。

桃井 ……うん。

いちこ ……そういえば、こないだの飲み会、千代子すごい楽しそうだったよね。

桃井 あー、そうだな。

いちこ あの子があんなに楽しそうにしてるの久々だったから。高校からの友達で今でも会える子なんてなかなかないし、もっと会ってあげなきゃなって思ったよ。

桃井 いちこも。

いちこ ん。

桃井 いちこも、あんなに楽しそうにしてるの、久々に見た。

いちこ ……。

桃井 ……。

いちこ (微笑んで) じゃあね、また火曜に。

いちこ、去る。

桃井、いちこが去った方を見て。

桃井 ……さつさと帰ってんじゃねえよ。

桃井、先ほどの優しそうな顔から一変している。

桃井 ……仕事だろ、金だろ、メシに、広告まで出してやるって言ってるんだよ。一回

ぐらいやらせろ。……ブスがお高く止まってんじゃねえよ。

そこへ、飴村がやってくる。

いつの間にか、今ではない、過去の会話へ。

桃井と飴村。高校時代の一コマ。

飴村 ミツくん。

桃井 おお。

飴村 暗室、誰か使ってるの？

桃井 ああ、うん。

飴村 いちこ？ 一緒に帰ろって言ったのにい。

桃井 先生。

飴村 先生？

桃井 こないだの撮影会の現像だって。

飴村 そうなんだ。(入ろうとして)  
桃井 今は、やめとけば。  
飴村 なんて？  
桃井 集中したいから、入ってくるなって。  
飴村 それ先生が言ったの？  
桃井 ……。

桃井、暗室の扉を見つめている。

飴村 ……それで、ミツくんはここで何やってるの。  
桃井 別に。  
飴村 帰らないの。  
桃井 帰るよ。  
飴村 ……。いちこ見かけたら、下駄箱で待ってるって言うって。  
桃井 うん。  
飴村 ……ミツくん。  
桃井 なに。  
飴村 今、教室でちょっと面白い遊びしてるんだけど。一緒に来ない？  
桃井 は？  
飴村 ね、おいでよ。

飴村、桃井の手を引いて、消える。  
変わって、また過去の別の日の一コマ。  
屋外。学校の裏庭。いちこ先生がいる。

いちこ 先生。ただいま。  
先生 大丈夫か。  
いちこ はい。  
先生 そうか。佐糖。本当に、悪かった。  
いちこ いいえ。  
先生 でも。  
いちこ わたし、十分嬉しいから。  
先生 佐糖。  
いちこ いなくなっちゃったけど。今朝までここにいたんだよ。  
先生 そうだな。

いちこ 先生と、わたしの、二人のあの子がいたことは、消せない。

先生 ……。

いちこ わたしそれだけで、嬉しいんです。

先生 車乗って。

いちこ 送ってくれるんですか。

先生 いや。神様にお願ひに行こう。

いちこ え。

先生 おれたち二人の赤ちゃんが、そちらに行っても幸せでありますように、どうかよろしくお願ひしますって。

いちこ ……。

先生といちこ、微笑み合い、やがて別々の方へ、進む。そして。

先生 (深いため息をついて) 給料日前なんだって……。最悪だ。まあけど、グズラ

れなくてまじ助かったわ。頼むから慰謝料とか思いつくなよ。

いちこ。

いちこ 先生。もうこれで、私のこと忘れるわけにいかないですよ。毎年連絡しますか

らね、一緒にあの子のお参り行きましょうって。ねえ、先生。

餡村 ……。

二人の姿を遠くから、いつの間にか、じっと見ている、餡村。

首にかかったカメラを持ち上げる。ごつい望遠のレンズが付いている。

遠くから、二人の写真を撮影する。

カメラを下ろしてもなお、餡村の視線は二人を捉えたまま、離さない。



いちこ 餛村がいる。

二人でランチ。メインのお店から移動し、食後のコーヒーを楽しんでいる。餛村の手元には旅行ガイド誌が広げられている。

餛村 ね、ね、いちこはどう思う？

いちこ え、ああ、値段のわりにボリューム満点でびっくりした。けど、お昼に女同士で串カツ定食は、ちょっとヘビーかも。美味しかったけど。

餛村 え。

いちこ え。もう。そうじゃなくて、こっち。

いちこ ああ。撮影旅行の方か。

餛村 聞いてた？

いちこ 聞いてた聞いてた。

餛村 私たち、卒業旅行行ってないし。

いちこ あのさあ、今の仕事が終わってからもよくない？

餛村 終わってからはみんなバラバラになっちゃうもん。

いちこ 別に遠くに住んでるわけでもないんだし。

餛村 いつ誰がどうなるかわからないもん。

いちこ なにそれ、不吉な言い方。

餛村 ほんとのことだもん。だって。

いちこ なに。

餛村 ……。

いちこ なに？

餛村 ……卒業旅行行くはずだったあの日、いちこ車にはねられて入院して、そのま

ま、旅行流れちゃったんだもん。

いちこ あー、あの時はごめん。

餛村 いちこが謝ることじゃないけど……こうやってまた4人集まれたんだもん。

いちこ ……分かった、ひとまず、お店の子と相談してみる。

餛村 うん！

いちこ まだ行けるって決まってるけど。

飴村 分かってる。  
いちこ たまには千代子のわがままも聞いてあげないとね。  
飴村 え。  
いちこ なんかい出しちゃった、事故で入院した時のこと。あの時、確か千代子も体調崩して、結構長く入院したじゃない。  
飴村 あー。うん。  
いちこ けどあの時、確か、一回もお見舞い行けなかったんだよね。寂しい思いさせたんじゃないかなって、ずっと思ってたんだよ。  
飴村 あの時いちこ、胸と足の骨が折れて動けなかったんだよ、来れなくてもなんとも思っていないよ。  
いちこ ねえ、千代子。  
飴村 なに。  
いちこ 辛いことあるなら、相談してくれていいんだよ。  
飴村 何のこと。  
いちこ ミツくんから、会社での千代子のこと、聞いたの。  
飴村 ……。  
いちこ 仕事場って割り切ってるのかもしれないし、千代子も大人だから、こういうのはおせっかいかもしれないけど。  
飴村 ……。  
いちこ 会社の中にも、気軽に話せる友達作るのは、きっと悪いことじゃないと思うよ。  
飴村 ……だって、同じフロアの子と喋っても全然楽しくないし。  
いちこ ミツくんも心配してたよ。  
飴村 いちことかミツくんとか、先生と喋ってたら楽しいし。なんでそれだけじゃダメなの。  
いちこ ……千代子。  
飴村 ……。違う話しようよ。  
いちこ ……。わかった。じゃあね、……高校の時の話。顕微鏡の鏡・窃盗事件、覚えてる？  
飴村 え。なにそれ。  
いちこ 顕微鏡についてる、あのちっちゃい鏡。一時期あればっかり盗まれて、犯人探し、すごかったじゃない。外部犯のしわざとか、生徒全員指紋取られるんじゃないかとか、かなりの騒ぎになったの、覚えてない？  
飴村 ……よく覚えてるねそんなこと。  
いちこ 実はあれさ、うちのクラスの授業だったの。誰も自白しなかったから、わたしも何も言えなかったけど。なんかみんな、鏡のおまじないしてたんだっ

て。

鏡のおまじない。

いちこ  
なんかね、手のひらに乗るくらい鏡を塩漬けにして一晩おいて、翌日の同じ時間に取り出して綺麗な水で洗うんだって。で、部屋を出来るだけ暗くして、一本のろうそくに火をつける。その明かりの下で、鏡に自分の顔を写して、願いを事を書きながら、黒く塗りつぶしていくんだって。

いちゃ怖いね。

いちこ  
けどサチとかアイちゃんもやってたんだよ。願いが叶うまで鏡持ち歩いて、叶ったらハンマーで砕くんだって。

いちゃ  
そんなの流行ってたんだ。知らなかった。

いちゃ  
確か高3の夏前くらいだったと思う。あの頃、妙なものがいっぱい流行ったじゃない。屋上の霊通の話とか、ムラサキカガミとか、放課後4時4分4秒にエンジェルさんの足音をみんなで行くとか、あと……コックリさんとか。

いちゃ  
……。

いちゃ  
こっくりさんを怒らせたから、写真部はつぶれたんだって、噂になったよね。

いちゃ  
……。

いちゃ  
何となく、わたしもミツくんも触れないようにしてた。部活自体は楽しかったし、終わり方が変だっただけで、3年間を全部なしにしちゃうのは、違うなあと思ったし。けど、やっぱり話さなきゃとは思ってた。せつかく、4人がまたこうやって集まったんだから。

いちゃ  
お昼休み終わるから、もう行くね。

いちゃ  
まさかだけど、あんた、今もまだやってたり、しないよね。

いちゃ  
……やってないよ。

いちゃ  
千代子。あんた、昔つからちよつと危なっかしいんだよ。のめり込んだらとことんまでやらないと気が済まない。写真のことも、それ以外の事も。

いちゃ  
なんのこと。

いちゃ  
なんのこと、って。

いちゃ  
いちは成功したじゃない。

いちゃ  
は。

いちゃ  
あたしは失敗しちゃった。いちは成功したのに。

いちゃ  
……千代子。

いちゃ  
なに。

いちゃ  
わたし、聞いているからね。ミツくん。

いちゃ  
……なにを。

いちこ あんたがこっくりさんに何を願ったのか。

飴村 ……。

いちこ ……なんで先生と連絡取ったの。

飴村 偶然見つけて。懐かしくなって。それだけ。

いちこ ……。

飴村 ……。

沈黙。思い空気。振り切るように、いちこが話題を変える。

いちこ ……企画も大詰めだし、旅行は一旦なかったことに

飴村 (遮って) 旅行の事、ミツくんには明日会社で言ってみるね。先生にも連絡し

なくちゃ。

いちこ 千代子。

飴村 ねーいちこ、あたし、先生のライン知らないんだ。…いちこ知らない？

いちこ ……知らない。知るわけないでしょ。

飴村 そっか、なら仕方ないね、ミツくんにも聞いてみるよ。旅行楽しみだね。

いちこ だから。

飴村 「楽しみだね」。

いちこ ……場所、もう決めてるの？

飴村 もー、やっぱり聞いてなかったあ。さつきも言ったよー。わたしの Facebook

の、プロフィール写真のところって。

いちこ ……え。あそこって。

飴村 あたしたちの通った高校の、クラブハウスの奥にある、裏庭。

いちこ ……。

飴村 ねえ、いちこ知ってた？ あの写真、本当は外部の風景写真のコンペに出品し

てみればって、先生に推薦されてたんだよ。けど、無理だったの。なんでだと

思う？

いちこ さあ。

飴村 人物が写ってるんだよ。二人。木と木のあたりに小さく。先生は気付いてなか

ったけど、コンペの審査員が見つけて、仕方なく辞退したんだー。

いちこ ……え。

飴村 ほら、やっぱりいちこも気付いてなかった。よっぽどふたりとも、わたしに興

味なかったんだね。…あたしは、ずっと見てたのにな。

いちこ ……！

いちこ、青ざめる。

飴村は、じっといちこを見つめている。

いちこ、逃げるようにその場から立ち去る。

飴村、ひとり残される。

退店し、あるきながら、ひとりではぼそとしゃべっている。

カバンの中から、ピンクのキッチン用手袋を取り出す。

## 飴村

…最初に窓を開けておくんです。こっくりさんが部屋に入ってからられるように。鳥居を書いて左右に、はい、と、いいえ、その下に五十音が書かれた紙を用意して、鳥居の真ん中に五円玉を置いて、人差し指をのせる。こっくりさん呼び出すとき、十円玉を使うと、こっくりさんとは「遠縁（とおえん）」になって、近くにやっこないの。代わりに五円玉を使うと、こっくりさんと「ご縁（ごえん）」があつて、より近くにいらっしゃる。

「こっくりさん、こっくりさん、いらっしゃいましたら「はい」へ進んでください」。五円玉が、「はい」の方向に行ったら、こっくりさんがいらっしゃった証拠。そこからいろいろ質問するの。いらっしゃってる方が本当にこっくりさんなら、的中率は100%。でもね、問題なのは、来てるのがコックリさんじゃなかった場合。面白半分で作っていると、面倒な低級霊が下りてくる。お帰り下さいって言っても全然帰ってくれないし、最終的に憑りつかれたりするから怖いよね。ちなみに、来てるのがこっくりさんかどうかを、確かめる方法が一つだけあるんだけど。それはね。

手袋を両手に装着する。

夜、深い時間。薄暗い部屋。  
甘い匂いがこびりついている。どこかの調理室のようだ。  
ひんやりと涼しい。部屋の奥に、飴村と先生。

先生 飴村……大丈夫か。

飴村 ……。

先生 飴村……？

飴村 ……いらつしゃい、先生。

先生 飴村、お前、大丈夫なのか。

飴村 ……何がですか。

先生 何が、つて、お前が連絡してきたんじゃないか。助けてくれつて。来てくれな  
いと、……死んじゃうからつて。

飴村 ……そうなんです……排水溝が詰まっちゃつて……あとからあとからどんど  
んあふれてくるから、もう死んじゃうかと思ひました。

先生 排水溝……？

飴村 ねえ先生。

先生 なんだ。

飴村 あたし嬉しいです。

先生 え。

飴村 来てくれたから、ここに。

先生 ……。

飴村 先生が、こつちに、来てくれた。……嬉しい。

先生 ……？ ああ。

飴村 ありがとうございます。

先生 おれは、べつに。

飴村 やだな。先生に言つたわけじゃないですよ。

先生 ……？ なあ、飴村。

飴村 はい。

先生 佐糖が大変なんだ。お前にも連絡あつたらろ。

飴村 ……はい。

先生 今は桃井に任せてる。大丈夫なら一緒に。  
先生 お茶、飲んでってください。来て下さったお礼に。  
先生 ……え。  
先生 ね。  
先生 餡村。  
先生 餡村、コーヒーでいいですか。  
先生 ……おれは別に。  
先生 遠慮しないで。ここ、なんでも揃ってるんですよ。さすが洋菓子会社の調理室  
餡村 ですよね。あ、先生はお砂糖だけ、でしたよね。  
先生 ……なんでそんなこと知ってたんだ。  
先生 職員室の先生の机に、コーヒーカップとスティックシュガー置いてあるって。  
先生 職員室？ お前いつの話してんだ。  
先生 あたしじゃないですよ、いちこが言ってたんです。  
先生 いちこ……、佐糖。  
先生 知ってました？ いちこって、先生のこと好きなんですよ。  
先生 ……なんだ急に。  
先生 バレバレじゃないですか。いちこ、現代文だけは点数いいでしょ。うちの部  
餡村 入ってきたのも、絶対先生目当てです。写真撮らずに先生ばっか見てますから。  
先生 好き好きビーム出まくりじゃないですか、先生鈍すぎ。  
先生 ……そんなの昔の話だろ。  
先生 目撃者っていないんですか。  
先生 ……ああ。  
先生 ひき逃げ、なんですか。  
先生 ……警察はその線で動いてる、らしい。ブレーキ痕とか、衣服にタイヤの跡も  
餡村 あつたらしいから、おそらくひき逃げだろうって。……ただ、単純にぶつかっ  
先生 ただけでは、あんな風にはならないって。  
先生 ……。  
先生 あ……。すまん。……悪かった。  
先生 死ぬわけじゃないんですよね、いちこ。  
先生 もちろんだ。  
先生 ……2度目、ですネ。  
先生 ……そうだな。  
先生 「あの時」もいちこ、集合前に車に轢かれて。先生そのまま病院に直行して、  
餡村 わたしたち駅にほったらかしにされて、いちこの運ばれた病院も分からなくて、  
餡村 結局自宅に帰った、写真部の卒業旅行。

先生 ああ、あの時は、動転して、後からお前らの事思いだして、連絡してやればよかったって、本当に後悔したんだ。すまなかった。

先生 いいんですもう。だって先生がここに来てくれたから。

先生 ……ああ。

先生 ……ああ。けど、いちこも呪われてますよね。2度も同じ目にあうなんて。

先生 ……餡村。

先生 ……餡村。ねえ先生、こつくりさんって知ってますか？

先生 え。

先生 あたしたちが高3の時に流行って、問題になったあれ。いちこ、コックリさんやってたんですよ。いちこね、先生に恋人がいるかどうかとか、いろいろ聞いてたんですよ。もしかしたら、こつくりさんに呪われたのかな。

先生 (鼻を押さえて) なんだ。

先生 どしたの先生。

先生 餡村、この部屋、臭うぞ。

先生 え。

先生 生ゴミみたいな、何かが腐ったみたいな。

先生 餡村 先生ひどい。うちの会社、そんな変な臭いするもの置いてません。

先生 餡村 なあ、窓あけていいか。

先生 餡村 それはだめ。

先生 餡村 なんて。

先生 餡村 窓はだめなの。

先生 餡村 いや、でも……これ……、お前平気なのか。

先生 餡村 なにがですが。

先生 餡村 だめだ……窓開けるぞ。

先生 餡村 だからだめって。

先生 餡村 (窓に手をかける)

先生 餡村 だめ！

と、突然部屋のいたる場所から、ラップ音。

先生、窓にかけていた手を何かに激しく弾かれ、体ごと吹っ飛ばされる。

先生 ……え。

先生 餡村 窓開けたら逃げちゃう。

場面変わる。



桃井といちこがいる。桃井、一枚の紙を持っている。  
いちこのマンションの一室。一人暮らしのようだ。  
いちこ、なんとなく様子がおかしい。終始ソワソワとしている。

桃井 なんなの、こんな時間に。

いちこ 持ってきた？

桃井 あのさあ。

いちこ 持ってきた？

桃井 持ってきたけど。

いちこ ここに置いて。

桃井 いちこ。

いちこ つべこべ言わずに置いて。

桃井 ちょっと落ち着け。

いちこ 置けって言うてんの。

桃井 ……。

桃井、言われた通りに紙を置く。

桃井 お前、これ、やるの。

いちこ はあ。なにその質問。

桃井 ……いくつだよ、ほんと、ありえねえわ。こんな時間に呼び出されて、こんなもん作って持って来さされて。……とりあえず座れよ。落ち着いて。何があったの、話聞いてやるから。

いちこ 10円玉出して。

桃井 いちこ。

いちこ 10円玉。

桃井 ……いま持って無い。

いちこ じゃ作ってきて！

桃井 ……。

いちこ ……。

桃井 わかった。

桃井、ポケットからお守りサイズの中着袋を取り出す。  
袋は色褪せ、薄汚れている。

口の紐を緩めると、巾着からポロリと中身が出てくる。

それは、表面が真っ黒に塗りつぶされた、大き目のコインのようなもの。

いちこ

なにこれ。

桃井

10円玉の代わり。

いちこ

……え。

桃井

なに。

いちこ

……これ。顕微鏡の。

桃井

なんだ、知ってたんだ。昔、飴村に教えてもらったんだ。

いちこ

え。

桃井

こつくりさんは、別に降霊術なんかじゃない。複数人数の無意識と筋肉疲労による、単なる占いだよ。ダウジングと一緒に。真ん中に置くのは10円玉だろうが、五円玉だろうが、えんぴつだろうが、なんでもいいんだ。別にこれでもいいでしょ、丸いし、ちょうどいい。

夜の調理室に戻る。

先生と飴村。

飴村

おすわりください、先生。

先生

なに。

飴村

おすわりください。

先生

あめむら。

飴村

おすわりください。

先生、上から何者かに肩をぐいっと押され、ずしん、と地べたに座らされる。後方を確認しようと顔を動かそうとするも、首が回らない。というか、そもそも体が全く動かない。金縛りにでもあつたかのように。

先生

……なんだ。

飴村

先生、ごはん食べませんか。

先生

飴村、なにした。

あたしごちそうします。あ、でも材料ないんで、とりあえず買い出し行きますね。体が。

先生

飴村

会社の近所の串カツ屋さん、最近ハマってるんです。今から買ってきますね。先生は、ゆっくりしててください。

先生 飴村ちよつと待て。  
飴村 待って、先生ストップ。

飴村、先生を熱い眼差しで見ている。  
スマホを取り出し、先生の表情を、素早くカメラにおさめる。

先生 え。

飴村 やばい。

先生 ……。

飴村 やっぱかっこいいなあ。

先生 え。

いちこのマンションの一室。

いちこ 桃井、顕微鏡の鏡に指を置いて、こつくりさんをはじめている。

いちこ こつくりさん、こつくりさん、いらっしやいましたら、はいの方へお進みください。  
さい。

指はまだ、動かない。

桃井は、手元を見ず、いちこの様子を見ている。

いちこ ……なに。

桃井 いや。

いちこ 言いたいことがあれば言えば。

桃井 別に。人生何が起こるかわかんないなって。

いちこ は。

桃井 あれだけ入りたかったこの家に上がり込んでさ、まさか、あなたのこんな姿を見るなんてな。

いちこ !

指が、ゆっくり動く。はいの方へ。

桃井 はい。だって。

いちこ 動かしたの、あんたじゃないよね。

桃井 ……違うけど。



先生 …… 飴村。  
飴村 来てほしかったから。  
先生 え。  
飴村 お願ひしたんです。  
先生 誰に。  
飴村 そしたら先生来てくれた。これってすごいことですよね。  
先生 飴村。  
飴村 先生。好きです。  
先生 は。  
飴村 キスしてください。  
先生 はあ。  
飴村 ダメですか？  
先生 いや、あの。  
飴村 先生。  
先生 ……、そんなつもりは。  
飴村 じゃあ、いつか、してくれますか。  
先生 ……つ、わかった、わかったから、  
飴村 やったあ！ じゃ、買い出し行つてきますね！  
先生 飴村！  
飴村 やっぱり、いちこの方がいいですか？  
先生 え。  
飴村 やっぱり、いちこの方がいいですよねー、いちこ、女子から見てもめちゃうくら  
や綺麗だし。目で追っちゃいますよねー。もともと先生、女子高生をそういう  
目で見てたし、ほら、パンツとか見えたらラッキーとか思っちゃいますよね。  
けど先生、暗室に連れこんで二人きりとか、やめたほうがいいですよ。誰が見  
てるか分かりませんし、噂になったらどうするんですか。  
先生 ……。  
飴村 先生のこと、ちゃあんと捕まえといてね、こっくりさん。  
先生 ……こっくりさん？  
飴村 今もそこにいますよ。  
先生 何言つてんだ。……飴村、あいつをひき逃げした犯人、知ってるんじゃないの  
か。  
飴村 犯人は捕まったでしょ。  
先生 それは高校の時の話だろ。……今日の、2時間前の、ひき逃げの犯人だよ。  
飴村 知ってるわけ、ないじゃないですか。

先生 桃井が教えてくれたよ。お前が全部知ってるって。  
飴村 ……………もしかして先生、それを聞くために、ここに来たの？  
先生 おい、どけ。離せ、誰か上に乗ってるんだろ、早く降りろ！

飴村、先生の姿を、全身が写るように引きの絵で撮影する。  
撮影したスマホの画面を先生に見せてやる。

画面を見た途端、短い悲鳴をあげる先生。

反射的に立ち上がり後ろを振り向く。

そこには誰もいない。

画面には何が写っていたのか。

また、いちこのマンションの一室。

桃井 で、結局いちこは何がしたいの。  
いちこ は。

桃井 あー、うそ、わかった。お前……………、飴村を呪いたいんだろ。  
いちこ ……。

桃井 じゃ呪えばいいんじゃない、それで気がすむんなら。

いちこ どうせあんたが動かしてるんでしょ。

桃井 はあ。

いちこ あんたは指だけ貸してりゃいいのよ……………だいたいこの鏡。なんのおまじない  
かけてんのよ……………なんでこのタイミングで出してくんのよ……………勘弁して  
よもう。

桃井 ……こっくりさん、こっくりさん。この中に嘘つきはいますか。  
いちこ なに。

桃井 こっくりさんこっくりさん。おれの気持ちを消してください。

いちこ ミツくん。

桃井 こっくりさんこっくりさん。いちこを消してください。

いちこ 何それ。

桃井 こっくりさんこっくりさん……………あなたは本当に、こっくりさんですか。

いちこ ……(何かに気付いて)ダメ！

桃井 は。

いちこ ……その質問は、こっくりさんにしちやダメ。

桃井 ……。

指が、ゆつくりと、いいえの方に動いた。

いちこ  
いいえ？

かと思うと、紙の上をランダムに大きく速く、ぐるぐると回りだす。

いちこ  
なにこれ。ふざけないでよ。

桃井  
ふざけてないって、おれなんにもしてないって。

指がぴったり止まって。

いちこ  
え。

桃井  
「ノ」？

指が、一字一字、文字を選んでいく。

桃井  
ロ、ウ、コ、ロ、ス、オ……カ、……ア……サ、……ン。

いちこ、思わず指を離し、立ち上がってしまう。

桃井  
途中で離しちゃダメなんじゃないの。

いちこ  
……そんなことまで知ってたんだ。

桃井  
そんなことって、なに。

いちこ  
どこから？ どうやって？ なんなのあんた、本当に、気持ち悪い。

桃井  
そうか。……そうだよな。

いちこ  
いいけどね。どうせあんた、見てるだけの人だもんね。

桃井  
………！

いちこ  
今度もまた見ててよ。で、千代子にバレそうになったら、うまくはぐらかして。

桃井  
………なあ。

なに！

桃井  
お前のインスタの書き込み、あれ飴村じゃないから。

いちこ  
どうでもいいからもう。

桃井  
調べてもらったなら、ドメインが全然バラバラで、日本中のいろんな場所から書き込みされてるみたいで、特定は不可能だって。海外からのもあるし、分析不能の変なドメインもあるって。

いちこ

あつそう。……………ありがとう。

いちこ、出て行く。桃井、部屋に置いていかれる。

座り込んだまま、動かない桃井。

夜の調理室。

飴村が、うわ言のようにぶつぶつと呟いている。

飴村

こっくりさん、こっくりさん、いらっしやいましたらはいの方に進んで下さい。

先生

飴村。

飴村

こっくりさん、こっくりさん、わたしをしあわせにしてください。

先生

え。今の…………。

飴村

こっくりさん、こっくりさん、お望みの生贄はちゃんとお渡ししました。

先生

生贄。…………佐糖なんだな。

飴村

なに言ってるの、先生。

先生

なあ、佐糖を返せよ、あいつが一体なにしたんだよ、なあ、おれの佐糖を返せ

よ！

飴村

あんどう先生。

先生

寄るなって！

先生、近づく飴村を突き飛ばす。その拍子に、キッチン手袋が片方、脱げる。

飴村、倒れてうずくまっている。

先生、気まづくなつたのか、脱げた手袋を飴村に返そうとする。が。

先生

…………おい、これ…………。(赤い何かが見えて) え。

見ると、手袋の内側が妙に赤い。

怖いもの見たさで、少しひっくり返してみる。すると。

手袋の中が、鮮血で真っ赤に染まっている。

飴村、先生に向かって手袋が外れた方の手をさしのべる。

その手の人差し指の、第二関節から先が、失われている。

飴村

先生。

先生

…………指…………が。

飴村

先生が、教えてくれたんだよ。こっくりさんを逃がさない方法。

先生

え。



先生のブログで。

……！

ずっと読んでます。今のブログも、その前も、先生が先生をやめる少し前から始めた最初のブログも。全部。最初の方は、明らか隠し撮りとかも添付されてたから、ちょっと刺激的だったけど。

……どうやって。

大変だったのはね。

……どうやって。

右手の人差し指が五円玉から離れないようにどうやって、切断するか。

……！

先生

飴村

先生

飴村

先生

急ブレーキ、交通事故音。

桃井が立ち尽くしている。

屋外。夜。桃井の目線の先には、人身事故の凄惨な光景が広がっている。

しかし、桃井は救急車を呼ぶようなそぶりは、見せない。

立ち尽くし、目の前の光景を、じっと見つめている。

夜の調理室。

飴村

まず、念入りに研いだ左利き用のはさみを用意するの。最初に皮がぶちっとなって、そのあとぐっと力を入れると、中の肉がぐううっと切れていく。ウインナー切ってる感覚に近いかな。血があふれるからタオルは絶対用意して。こっくりさんの紙が血で汚れてしまわないように。女の子の力だったら、肉が切れるだけで、中央の骨まではどうしても切断出来なかった。だから、頑張つて力を込めて、骨に切れ目だけ入れるでしょ、後は、骨でつながっただけの人差し指を、五円玉から離れないように注意して左手で持って、えいって、90度横に倒すの。

先生

やめろ。

飴村

それからもまだ大変だったんだよ。切断した人差し指を、どうやって自立させるか。ほら、会社の近所の串カツ屋さんの、食べ終わった串をね、人差し指の切断面、白く見える骨のすぐ脇に、くっと差し込んだの。串が肉に刺さる感覚の中に、ごりっ、ごりっ、って、たまに骨に当たると感覚がした。乱暴にやって人差し指のかたちが崩れちゃいけないし、割けたりなんかしたら元も子もない。ゆっくり、ゆっくり、指の中に串を埋める。最後に皮がぶちっといって、人差し指の腹の皮を貫通して、五円玉の穴に、串の先がちょうどはまって、下の紙を貫いた。あたし天才かもってその時思った。血が足りなくて頭ふらふらしたのに、思わず天才って叫んじゃった。

先生、いつの間にか叫んでいた。

飴村

……やっぱ臭いよね。

先生

……は。

飴村、後方を見つめる。

業務用の冷凍庫のモーター音が、ブウン、と、低く鳴っている。

その冷凍庫に、愛しいものにするように、そっと頬を寄せる、飴村。

飴村　こおり、いっぱい作って敷き詰めて、ここに入れて保存してるんだけど、やっぱりダメだよな。

先生　冷……凍庫……。

飴村　ドライアイスとかがいいのかなー。明日にでも買ってくるから、ねっ、今日だけはちょっとだけ我慢してね。

先生　助けてくれ……誰か……佐糖。

飴村　ごめんね先生、いちこは生贄じゃないんだ。いちこは単に、消えて欲しかっただけ。

先生　……たすけてくれ。

飴村　せんせい。

先生　たすけてくれ！

先生　先生のこと、心が、手に入っていないと気がつく飴村。  
悲しい。

人差し指の失われた自分の手を見つめる。そして。

飴村

こつくりさん、こつくりさん、わたしをしあわせにしてください。こつくりさん、こつくりさん、わたしをしあわせにしてください。こつくりさん、こつくりさん、……わたしをしあわせにしてください。

冷凍庫の中。こおりの間を「なにか」が動く、

カランカランという、涼やかな、綺麗な音がする。

幕

## 【登場人物の詳細】

### ・ 鮎村千代子

洋菓子会社のしがない事務スタッフ。高校時代は写真部に所属。鮎藤を会社のコピーライターに推薦した。鮎藤とはFacebookで再会したとうそぶくが、実はずっと鮎藤の書くブログの読者であった。鮎藤のことは高校時代から好きだが、当時もただ見つめるだけで進展はなし。現在に至る。ストーリー氣質。学生時代、クラスで流行っていたこっくりさんをし、「いちこを消して」とお願いしたことがある。事故との因果関係は不明。

### ・ 佐糖いちこ

地元の小さな小売店で務めているパティシエ。高校時代は写真部。桃井に抜擢され洋菓子の新商品企画のアドバイザー兼デザイナーとして、桃井の務める会社に出向することに。高校時代に事故にあい、2ヶ月間入院。鮎藤に恋心を抱き、入院期間に親密な関係になったものの、鮎藤との子供を身ごもってしまい、中絶を選ぶ。高校を卒業後は、鮎藤とは疎遠に。今でも写真は続けている。インスタグラムユーザー。

### ・ 桃井蜜ル

洋菓子会社のマーケティング部、チームリーダー。高校時代は写真部。学生時代からいちこに想いをよせる。いちこを新商品企画会議に誘い、出向してもらうことに。いちこ、千代子とは高校時代から腐れ縁の仲。学生時代から頭も良く、仕事もばりばりこなし、人望も厚い。いちここと鮎藤が再会してしまったことに焦るが、学生時代同様、いちこの想いを応援するような立ち位置を取ってしまう。

### ・ 鮎藤

元教師。独身。高校教師（担当は現国）をリタイアし、現在は自称フリーライター。主な収入源はプロブロガーとして、興味もないネタブログの記事を書いている。最近では都市伝説や眉唾の心霊体験のブログを更新。過去、イチコと親密な関係になったことがある。が、教師を辞めることになった原因は不明。もとより女子高生を教師らしくない目で眺めていた性格。イチコに子供を降ろさせている。写真部の顧問だった。

それは突然だった。

高校時代に因縁のある4人が、とある社内の新商品企画会議で再会する。

彼女は再び「あの」儀式をする。

【上演記録】

Forum Enters The Theater (演じるフォーラム) #1

「供犠」

脚本・演出 竜崎だいち

●開催日

2018年8月31日(金) ～9月2日(日)

●会場

浄土宗應典院 本堂

●出演

飴村 … 細野江美 (Shiny chouchou)

先生 … 桐山篤

いちこ … 河上由佳 (満月動物園)

桃井 … 岡村圭輔 (劇団老劇屋)

●主催

應典院寺町倶楽部

●運営

FEET ワーキングチーム

●協力

羊とドラゴ、Shiny chouchou、満月動物園、劇団老劇屋、浄土宗應典院